

<紹介・インタビュー>

仲地清氏に聴く
— 『戦場よ永遠に』 (1960年) に出演して —

**An Interview with Mr. Kiyoshi Nakachi on
Appearing in *Hell to Eternity* (1960)**

インタビュー・構成：志村 三代子 名嘉山 リサ

SHIMURA Miyoko, NAKAYAMA Risa



図1 『戦場よ永遠に』 ロビーカード。中央はビル (デヴィッド・ジャンセン) に救出される女の子。右下はガイ (ジェフリー・ハンター) とキヨシ (仲地清氏)

本インタビューの目的は、1960年に製作されたハリウッド映画『戦場よ永遠に』(アライド・アーチスツ、フィル・カールソン監督)の撮影の思い出を、子役として出演した仲地清氏(名桜大学名誉教授)に証言していただくことである。「サイパンの笛吹き男」と呼ばれ、サイパン戦で1000人もの日本兵・民間人を無血で投降させたガイ・ガバルドンの自伝の映画化として知られる『戦場よ永遠に』は、ロサンゼルスの日系人家庭で育った

ガバルドンの生い立ちや海兵隊での活躍などの半生が描かれている。ガバルドンが海兵隊入隊後、サイパン戦で活躍するまでの場面は、当時米国の占領下にあった沖縄をサイパンやハワイなどに見たてて撮影された。沖縄ではじめて「日米合作」のハリウッド映画のロケが行われたということで話題になり、在沖海兵隊が製作に全面協力したほか、沖縄住民が多数エキストラやスタッフとして撮影に協力した。その中で、ラストの投降場面で主人公のガイ・ガバルドンに声をかけられる少年を、当時小学6年生(12歳)であった仲地清氏が演じている。

インタビューは2015年5月31日に宜野座村文化センターがらまんホールで上映会とシンポジウムを企画・実施した。その際、仲地氏に当時の思い出を語っていただいたが、同日行った本インタビューでは、さらに具体的な当時の撮影状況について伺った。2014年に、仲地氏に取り次いでいただいた元宜野座村副村長の岸本宏和氏にこの場を借りて御礼申し上げたい。

——エキストラに応募することになったきっかけを覚えていらっしゃいますか。

仲地氏 もともと私が出演する場面は、原案にはなかったけれど、沖縄で撮影するうちに監督の発想で生まれて、現地の子役を急ぎよ探し出す必要があったと聞いています。私は当時、^{きん}金武小学校に通っていましたが、映画関係者が、「子役を探しているのですが、いい方いませんか？」と小学校に来たんだと思います。それで金武小学校代表として推薦されました。

——仲地さんが立候補されたのではなく、周りから推薦されたのですね。

仲地氏 はい、推薦されて。

——推薦されたのはお一人だけでしょうか。

仲地氏 金武小学校からはね。現場に行ったら何名かいました。4、5名はいたかな。

——その子供たちは近隣の小学校から来ていたのでしょうか。

仲地氏 それはよく知らない。まあ少なくとも宜野座、^{かなな}漢那、中川周辺の近隣市町村の子供たちだったら大体顔が分かるけど、そうじゃなかったね。数名候補者が来て、監督さんからいろいろ審査されましたよ。

——審査員は、フィル・カールソン監督以外にはいらっしゃいましたか。

仲地氏 私はその辺はよく分からないけど、審査というか、いろいろな表情をテストされた覚えがあります。

——それはカメラの前でということですか。それとも監督の前でしょうか。

仲地氏 監督の前で。後ろにカメラがあったのかよく分からないけど。どこかの写真にもありましたが、身体のかな監督だったから、どかっと座って、私が演技するのを見ている感じがしました。もしかしたら主人公の方々もいたような気はする。

——では、そこで何人かの大人に囲まれて演技をされたのですね。

仲地氏 そうそう。

——演技はその時が初めてだったのですか。

仲地氏 勿論初めてでした。「やってごらん」というので、子どもながら素直に従いました。「怒ってごらん」と言われたら怒るとか、「涙を流してごらん」と言われたら涙を流すとかいうこと。映画撮影の時は、米軍さん、監督さんと日本人、沖縄人がいたので、通訳

がいらっしやいました。

——その候補者の中に女の子もいましたか。

仲地氏 いました。女の子(図1)と映画にも出てくるお母さんの方がいました。女の子は多分那覇の方ではないかという気がしました。僕より小さかったんじゃないかな。お母さん役は乳飲み子をおんぶして、そしてさらに小さい女の子がいてね。映画にも出てきます。



図2 『戦場よ永遠に』より、投降シーン(子供を背負った女性の隣の白い包帯の少年が仲地氏、その隣がジェフリー・ハンター)

——撮影に参加された期間はどのくらいだったのですか。

仲地氏 2週間ぐらいだったと思います。

——その2週間の間は毎日撮影があったのでしょうか。

仲地氏 はい、ずっとというわけではないですが。撮影はOKが出るのに時間がかかりますね。奥の方からぞろぞろと住民が歩いて投降するシーンは1シーンかそこらだとは思いますが、実際はNGがでて、何回も演技をさせられました。それから、太陽が出ているものですから、汗がすぐ乾いてしまう。そうするとそばから、アイロンにかけるスプレームみたいなものをかけるスタッフがいました。それも何回かね。1シーン撮るのにどれくらいかかったかな。私のところだけで言うと、午後から撮影して、やっと1シーンというぐらいでした。カメラマンがぼんぼんぼんと撮って終わりかと思ったから、捕虜のエキストラの方々は大変だったでしょうね。出て行って戻って、また出て行って、また後ろに行つて、そういうことがありました。

——参加した撮影現場はどちらだったか覚えていらっしやいますか。

仲地氏 当時われわれは、撮影現場を「オランダ森」と言っていました。方言では「ウランダムイ」と言います。ペリーの時代に沖縄に探検隊が来て、地図を作るために探索したのですが、だいたい当時はアメリカ人だろうが他の西洋人だろうが、みんな「オランダ人」、方言では「ウランダー」と言っていました。多分そこにもオランダ人、いわゆるアメリカ

人が来たんでしょ。ブルービーチから金武岬沿いですよね。長い道があって、良い撮影場所だったんでしょ。今の地形と比べるとちょっと変わった感じがします。今はブルービーチからの戦車道になっていますね。

——撮影の間は、現場までどうやって通っていらっやったのですか。

仲地氏 車で迎えがあったと思う。乗用車じゃなくて、兵隊さんのジープだったのかなという気もします。

——軍のジープがご自宅まで迎えに来たということでしょうか。

仲地氏 いえ、学校まで。金武はとても移民の多い村で、金武小学校の校舎は古かったけどかっこよかったです。

——1人だけ学校の授業を抜けて撮影に行かれたのですね。

仲地氏 ただ、公的な休みということでした。

——撮影の雰囲気はどのような感じでしたか。

仲地氏 雰囲気は、まあとても楽しかったです。なぜかというと、初体験でお祭りのような感じがしたから。沖縄の人、兵隊さん、民間のアメリカ人、見物人もいるでしょう。場所が場所だけど、とても広く、金武で撮影ということになると、金武、宜野座の村人たちが見に来て、カーニバルのような雰囲気でした。

——食事が良かったと伺いましたが、どのような食事が出たのでしょうか。

仲地氏 食事は、兵隊さんの食事。皆さん分かるかな。大体アメリカの食事はプレートの中にソーセージ、ビーンズ(豆)、肉があるという感じで、結構おいしかったです。マリソン(海兵隊)の演習の時もそうですが、大きな野外レストランのようでした。

——トレーを持って、入れてもらう感じでしょうか。

仲地氏 そういことです。そういう食事を入れてくれる方がいたような気がします。それに、コカ・コーラとかペプシとか飲み物は結構自由に飲めました。

——エキストラをされた何人かにお話を聞いたのですが、皆さん「楽しかった」とおっしゃっていました。

仲地氏 楽しかったですよ。監督の人柄の良さもあったのかな。普通、監督のイメージは「さあ怒れ！笑え！ダメ！」と厳しいものだけど、この監督さんはとても温かな方でした。私とペアだった主人公のジェフリー・ハンターさんから「もっと大きな声」とか、「もっと胸をはりなさい」と指示がありました。私にとってはどちらかということ、ジェフリー・ハンターさんたちが映画作りをしているのかなという感じがしました。

——ジェフリー・ハンターさんから直接指示があったのですか。

仲地氏 そう、直接ね。とても可愛がられましたよ。主人公だけじゃなくて周囲の兵隊さんからも。その意味ではとても和やかでした。1960年代当時、まだ沖縄では、映画撮影がどうやって行われるのか、特に外国映画がどうやって撮られるのかということはまだ知られていなかったのでしょう。周囲の人々も私のことを「この子、良い体験をしているね」と思ったかもしれない。その意味では、「さあ、今日は映画に出るぞ」という気負いはなく、自然体で、ただ行きたみたいなものでした。また撮影の雰囲気が、ビーチ沿いで、木があって、村人たちがたくさん来て、食事が出たものだから、余計にカーニバル的でした。村人にとっては「ああ、映画撮影ってこんなものか」という1つの体験だったのでしょう。

—では、現場では、この映画の説明などはなかったのでしょうか。

仲地氏 説明は、ちょっとありましたが、小学6年生だったから、よく意味が取れなかったです。撮影が終わって半年後くらいに映画を見て、初めて、ああ、こういう物語だったのかということと、特に主人公が日本の家庭で育った物語だということが後で分かりました。作品の本当の意味というのは最近やっと分かったという感じがします。

—劇中で清（キヨシ）と名前を発せられていますね。

仲地氏 名前はオーディションで決まった時点で知っていたはずなので、その時に脚本に加えたのか、監督さんが撮影現場で使うと決めたのか、そこはよく知りません。ただ、サイパンの物語を沖縄で撮影したということ、これだけの沖縄の方々が参加したことを考えると、監督さんとしても何か沖縄の思い出というのを残したかったのかな。それは監督さんなのか、あるいは、私の直接のペアは主人公のジェフリー・ハンターさんですから、彼の思いなのか。私は撮影が始まって2、3日後から主人公にずっと手を引っ張られて行くし、食事と一緒に連れて行かれるし、親しみ度はジェフリー・ハンターさんのほうが強いわけです。ハンターさんが「キヨシです」と言わせることにしようと言ったのか、監督さんがそう言ったのか、その辺はよく分かりませんね。



図3 『戦場よ永遠に』より、当時12歳の仲地氏

—映画の中で、主人公のガイがキヨシに「連れて行く」と言いますが、そう言ったのは撮影の時は分からなかった、ということですか。

仲地氏 分からなかった。これもまたあとで「ああこういうストーリーだったのか」と思いました。

—キヨシが出てきて行進する場面で隣にいる乳飲み子をおんぶしたお母さん役の方とは面識があったのでしょうか。

仲地氏 この方は全く面識がなかったです。だからその方も含めて、その後どうなったんだろう、会いたいなという思いがあります。

—撮影の際に、その方とペアにされて、「一緒に歩きなさい」と言われたのですね。

仲地氏 そうそう。映画の中に、木の上に登っているおじいちゃんが撃たれてパタンと落ちるシーンがあるんですよ。その人とお母さん役の人は親しかったから、前々から知り合いだったのかなという気がしました。映画の撮影期間はずっとコザ、金武、美里などでも撮影したので、その間に、沖縄側で、ちゃんとしたかたちでの契約をされていたスタッフがいたのではないかと思います。

——撮影期間が2月から3月で、映画の中の仲地さんは上半身裸で歩かされていますが、寒くなかったのでしょうか。

仲地氏 寒くなかった。寒くなかったというよりも天気が良かったと思います。

——映画が公開された時はどちらでご覧になったのでしょうか。

仲地氏 石川（現うるま市）で観ました。そこに洋画系を上映している石川オリオンという映画館があったんですよ。

——ご家族でご覧になったのでしょうか。

仲地氏 私1人で行きました。そこに看板が出ていたものですから。

——ご自分の姿を初めてスクリーンでご覧になった時はいかがでしたか。

仲地氏 ああ、これはねえ、なんというかなあ。練習なしの初出演にしてはよく出来たなあと思いましたよ（笑）。まあ、素直な田舎の子だったかもしれないね。

——ジェフリー・ハンターさんにも「キヨシ」と呼ばれていたのでしょうか。

仲地氏 ああ、そうそう（笑）。アメリカ人は親しみを込めてファーストネームで呼びますよね。まあ、そういうのはアメリカ的な、いわゆる親しみの込め方だったろうなあ。

——映画が終わった後も、ジェフリー・ハンターさんとはしばらくカードの交換をされていたそうですね。

仲地氏 2、3回しました。文章はないけど、自分のサインを入れたクリスマスカードが来ましたよ。

——仲地さんもカードを送られたのですか。

仲地氏 もちろん（笑）。よく届いたなと思っておりますよ。だってあれだけの映画俳優さんだから。世界中からファンレターが来るでしょう。3回くらい返答してくれてね。ああ、覚えていたんだなあと思いましたよ。

——今はお手元にはないのでしょうか。

仲地氏 ああ、無いね。私は、ジェフリー・ハンターさんがどのレベルの映画俳優さんか分からなかったものだから。『キング・オブ・キングズ』（1961年、ニコラス・レイ監督）の主役になるくらい有名な俳優だったのかということとは後で分かりました。

——1960年前後に、この作品の撮影に対して批判的な方が少なからずいたと思われませんか。

仲地氏 いたような気がする。今振り返ると「ハリウッド映画が沖縄で撮影される」というと、映画史においては重要なことですよ。1960年の新聞を見ましたけれど、記事の内容、スタイルを見ても、まだ評価されていないような気がしたんです。例えば「サーカス団が沖縄に来る」とか、そういうようなこととは違い、ハリウッド映画が沖縄で撮影されることはもっと大事なことだと思うんですけど。

——『戦場よ永遠に』のプロパガンダ性についてはどう思われますか。

仲地氏 もちろん当時は子どもだから分からないわけです。数年後に「海兵隊の宣伝映画

じゃないの?」というようなことを聞いたことがあります。成人してから、私も心を痛めたことがあります、一時、映画に出演したことを黙っていた時期もありました。沖縄の占領政策宣伝というのは映画でやる方法もあるし、音楽あるいは文筆活動もあるでしょう。当然、アメリカは良い政治をしていますと、いろいろな角度でPRしますよね。この映画の内容は、ある人が日本人を救ったということになっているけれども、日本人を救ったということだけを見ると、良い面がある映画でもあったということ、私は今再発見しています。どのくらいの方がプロパガンダだったと思ったかはまだ良く分かりませんが、敢えて「いい映画でしたよ」という人はそんなにいなかった。先ほども言ったように、私の出演場面は、沖縄の撮影時に、監督の発想で生まれたと聞いています。その意味で、この作品はプロパガンダからヒューマンな映画となり、数百人のエキストラも映画作りに心よく参加できたし、それに誇りを持っていたと思っています。

——この映画はサイパン戦を題材にしていますが、それをなぜ沖縄で撮ったと思われませんか。

仲地氏 サイパンに地形が似ているから沖縄で撮影したようですが、このことはあまり知らなかった。まあ、確かに地形が似ているんですよ。映画を見てみると、特に捕虜が大勢歩いてくる場面なんか沖縄だから集められたと思います。これだけの日本人はサイパンでは集められないでしょう。それも含めて沖縄で撮影したと思うんだけど、この映画はサイパン島を舞台にしている、ということは長い間分からなかった。当時は、物語がサイパンで起こっていると思ったにしても、まだ私の頭では主人公が住民を救ったという映画というところまで発展させることができなかったです。

——仲地さんは大学で国際政治学を専攻されましたが、それはこの映画が少なからず影響を与えていたのでしょうか。

仲地氏 これはあまりないね。やはりわれわれ沖縄で育ったものとしては、沖縄の政治、国際政治の中の沖縄、アメリカの中の沖縄を考えるので、自然に沖縄、世界となる。沖縄、ハリウッドにはいかないんだ。われわれの思考方法が、沖縄、世界。沖縄、米国。沖縄、基地なんだよね。小さい時から日常的にアメリカとお付き合いがあったものだったから。例えば、金武小学校時代でも、よくアメリカの兵隊さんが来て野球を教えたり、英語を教えたりするような交流のあった時代に育っているものだからね。その辺まで大きな気負いはなかったな。しいてプラスで言うと、幼いながら外国映画に出ることができたこと、そして堂々と「キヨシです」と言えたことは、小さいながらも国際舞台でやっていけるという自信にはなったかもしれないね。地元の子どもの私だけじゃなくて、出た方々もそうだったかもしれない。例えば20代、30代、40代の方々と、そんなに違和感なく、共同で作品を作る、という気持ちぐらいじゃなかったかな。

——小学校に兵隊さんが来て英語を教えたりしたということですが、その当時はどこでも頻繁に交流があったのですか。

仲地氏 基地のそばにある小学校は、大体リトルリーグを作っていて、交流は頻繁にありましたよ。兵隊さんがグローブとかバットとか持ってきて、例えば金武なら、金武小学校のチーム、久志だったらキャンプ・シュワブのチーム、松田や石川にもあったかな。クリスマスパーティーとか、外人さんの教会にもよく招待を受けたし、アメリカ人の牧師が来て易しい英語で、聖書について話すとか、そういった交流はよくありました。

—それを子供達が聞くということですか。

仲地氏 ええ。まあ歌ぐらいはできるわけだから。賛美歌ぐらいはなんとなくね。

—その米兵さんは遠い存在あるいは怖い存在という意識を当時は持っていらっしやいましたか。

仲地氏 なかったです。僕らが小さい頃の兵隊さんは短めの髪型をして、アイロンもピシッとかけられていて、靴もきれいに磨かれた、いわゆる紳士でした。兵隊さんが崩れだしてくるのは、私の観察からすると、ベトナム戦争の後からです。アメリカ人がちょっと退廃的になってきて、厳しいピシッとした人がだんだん少なくなってきました。それが今もずっと続いているような感じがします。その辺のところから少しばかりいろいろな犯罪も出てきました。われわれの時までは交流があって親しみがある、今で言うところの「良い隣人」ですね、当時はそういうのがありました。今はないと言われていますが。

—アメリカ兵は、格好よかったですよね。

仲地氏 格好いいどころじゃないです。当時はタクシー代でもドルが高い時代ですから、お釣りはいりませんということになるし、アメリカ人は良い人だったよ、ということになっているわけです。

—仲地さんは、戦後生まれで、直接沖縄戦の体験はされてはませんが、戦争を体験されたご両親やもっと年上の方々と仲地さん世代、つまり、戦争を体験している世代と体験していない世代では、米兵に対する意識の差があったのでしょうか。

仲地氏 これは戦前派とわれわれ戦後派とになるわけだけど、体験というのは大変なものでね。まず、われわれは戦争体験がないので、戦争の厳しさ、むごたらしさは分からないし、アメリカに対する嫌悪感のような感情はあまりないですね。われわれの世代は、それよりは教育者、つまり英語の先生としてのイメージと、先ほども言った凛々しい、憧れのアメリカ人という感じでした。

—ご両親の反応はいかがでしたか。例えば「この撮影に参加するんだ」というような話しをした時に「ああ、ぜひ行って来なさい」という感じだったのか、それとも「そんな映画に出るの」と、どちらの反応だったのでしょうか。

仲地氏 「こんな映画に出るの」というのはなかったです。「よく選ばれたね」と言われたのかな。あるいはそこまで言われなくても、さっき言った自然体というか、行ったからには交流でしょ、というぐらかな。特別に選ばれて行ったということよりも、まあせっかく隣で映画を撮影しているから、協力できて良かったねという感じでした。例えば、ある映画の子役に何名か応募してやっと子役に選ばれて、1人のエンターテイナーとしての一里塚を築いたというような評価じゃなくて、まあよく撮ったなという感じで、この映画に出たからいい生徒だったとは両親も何も言わないし。

—米兵は少し前まで敵だった人たちですよ。そういう人たち、しかもその戦争を題材にした映画に出演するというのは、戦争体験をした世代の方々にとってはかなり複雑なものがあつたのかと勝手に想像してしまいましたが、周りの大人のエキストラの方々は、どのような雰囲気だったのでしょうか。

仲地氏 これは、実際私も興味があることです。サイパンで起こった事を映画にしたということになっているわけですが、以前、 Guam 大学に勤めたことがあるので、サイパンに何度か行ったことがあるんですよ。サイパンという島は「バンザイクリフ」や「スーサイ

ドクリフ」という場所があって、要するに海に飛び込む死に方と、山から落ちる死に方とというのがあったんです。そこは砂浜がないので、飛び降りるともう一卷の終わりです。山も、険しい山があってポーンと落ちる場所があるのですが「ここで落ちたのかな」と思うわけですね。年配の方々が、どういう気持ちでこの映画に参加したのかと考えるけど、ギャラがいいから、アルバイトとして参加したのかなとも思います。でも、戦争体験者の方々がどういう気持ちだったかなあということまでは、僕らの世代はちょっと分からないね。——小学6年生にもギャラが払われたのでしょうか。

仲地氏 どうだったかな。個人的に受け取った記憶はないですね。学校に謝礼を支払ったかどうか分かりませんが、製作側から学校に口頭でのお礼はあったと思います。

——映画の撮影後、ロケ地での土地焼却・賠償問題のことが新聞に取り上げられました。その話をきかれて、カーニバルみたいに楽しかったという気持ちは変わりましたか。

仲地氏 それはあまりなかったです。ただ、どういう地主さんや区の許可をもらってやったのかとは思いますが。このことは、アメリカ人の、高圧的というのかな、われわれがここを占領しているんだという感じを表している気はします。

——映画が公開されて、学校の友達などから反応がありましたか。

仲地氏 もちろん、学校の友達からの反応もあったし、一緒に出ていた20代、30代、40代の方々からもとても大事にされて、例えば「君は、これが終わったら、そのままハリウッドに引っ張られて行くかもしれないよ」と、大げさな冗談を言う人もいました。私はまだハリウッドも何も分からないし、洋画も分からないものだから、どういう意味だろうと思っていたけれども。ある意味では人気者になりましたよ。それから、この映画と一緒に出たおじちゃんおばちゃんたちが、よく私に「良い子どもだね」というふうに言ってくれ



図4 比嘉松盛氏（左から4人目）が長年財布に入れて持ち歩いていた撮影当時の写真。左から3番目が仲地氏。

たことが印象に残っています。ですので、監督の付き人だった比嘉松盛さんが何十年も経ったのに私の名前を憶えていたことに驚きました。比嘉さんは2013年に「琉球新報」にロケの写真(図4)を掲載し、私に写真を手渡したいと申し出たのですが、大体年齢的には当時小学5年か6年ぐらいで、今は大体60代の初旬か中旬だろうということも書かれていました。周辺のスタッフあるいは監督さんに近い方々が名前まで憶えていたのかと、感謝しています。比嘉さんも、僕への手紙の中で、この子はいいところまで行く人になるだろうと予測していた、あるいは期待していたということが書いてありました。まあ、私は結果的に俳優ではなく、大学の先生になったわけだけけれども。比嘉さんは「さすが大学の先生になったなあ」とは言いながらも、もしかしたら私の名前を新聞などで見たことがあったかもしれないけど、確証がなくて改めて新聞に頼んで僕を探したのかな。新聞記事が出たことで、結果として、そういうふうに分の親からというよりは、周から褒められたということが非常に嬉しいです。

本研究は JSPS 科研費 (16K02319 研究代表者・志村三代子) の助成を受けたものです。

Received : October, 4, 2017

Accepted : November, 8, 2017